



発行・京都障害者スポーツ振興会
題字 芝田 徳造

「つどい500へ」芝田先生に学ぶ

京都障害者スポーツ振興会
つどい専門部長 辻井 武

「つどい450」の財産って何？つどい450のまとめ会議でのスタッフの声です。

450以前のつどいの記念行事は、大切にしたいことや内容の話・具体的な準備を1年以上前から取り組んできました。残念なことには「つどい450」はスタートはほぼ1年前でしたが、本格的に取り組めたのが3月前と短かったのです。一緒に記念事業を作り上げるところから生まれてくるスタッフの共通理解・交流という財産づくりが不十分になってしまいました。その反省から、つどい450終了半年後の昨年末から「今からつどい500」の準備をスタートさせる」ということを決めました。

「つどい」の意義を話し合い、つどいの強みと弱みを考えました。話しているうちに多くの意義をつどいは持っていることを感じました。また、スタッフのつどいに対する思いは、さまざまであり、幹となることや枝葉となることがあることを感じました。さまざまなつどいの意義を整理し、今後のつどいの方角性を明確化させていく作業を現在重ねているところです。

明確化を進めるために、「つどい創設者であり、京都の障害者スポーツの父である芝田徳造振興会顧問に、お話を聞きたい。」という強い意見がスタッフ全員から出ました。

振興会のスタッフの中で、「つどい専門部とつどい以外の専門部のスタッフとの連携が十分できていないのでは？今の京都の障害者スポーツにとってつどいの果たす役割は？などいくつかの疑問が出ました。振興会40周年という節目に振興会とつどいについて考えられないだろうかという思いが出てきました。

そこで先生にはぜひ、京都の障害者スポーツ・振興会の過去・現在・未来を視野に入れながら、つどいの過去・現在・未来を語っていただきこう。芝田先生のお話からきくと多くのことが見えてくる。と考えて講演をお願いすることにしました。

去る6月12日午前、演題「振興会の過去・現在・未来」の中でつどいの持つ意味として以下の講演して頂きました。

- 一・振興会発足以前の京都
- ・日本初の目・耳の不自
- 由な人の学校（京都盲啞院）ができる。視覚障害者の柔道や円周走を授業で取り組む。ローマオリンピックの後に初めて開かれたローマパラリンピック
- の第二回は、一九六四年東京パラリンピックだった。
- 大会出場選手は出発日に初めて出会う大会に行つてからルールを教える状況。
- 二・京都府立体育館の建設と振興会の設立

- ・一九七一年府立体育館開館し、障害者スポーツの器具を購入し障害児者の積極的な利用を呼びかけた。振興会が設立。会の基本理念「スポーツの輪を広げる（軸足の重点）」、「スポーツの高度化の推進」一九七二年二月教室開催。五月つどい開催。以降毎月開催。「つどいは京都の障害者スポーツの原点」
- ・つどい実施の苦労。手探り（当初は場所提供）子ども増加で指導も開催前後のミーティングやスタッフの努力で徐々に今日の状態へ接近。
- 三・国際障害者年と京都国体
- ・一九八一年国際障害者年記念・全京都障害者総合スポーツ大会の開催。
- ・一九八八年第二十四回全国身体障害者スポーツ大会開催（準備8年）
- 京都が全スポの改革を大きく先導。電動車いすスラローム・障害児者と介助者によるマスケイム・開閉会式の椅子の提供・卓球バレー・車いす駅伝・シンクロなど。
- 四・車いす駅伝と事務局開設
- ・一九八九年全国車いす駅伝競走大会開催。専任

行事予定	9月	13(火)	丹波障害者のスポーツのつどい	丹波自然運動公園	来月のつどいは 10 / 9 第2日曜日
		18(日)	234回障害者水泳のつどい	伏見港公園プール	
		19(月・祝)	第31回全京都障害者総合スポーツ大会 陸上大会	京都市西京極陸上競技場	
		25(日)	第31回全京都障害者総合スポーツ大会 アーチェリー大会	南丹市日吉総合運動広場	
	10月	2(日)	全京都障害者フライングディスク大会	サン・アビリティーズ城陽	
京都障害者スポーツ振興会ホームページ TEL/FAX075-712-7010 http://web.kyoto-inet.or.jp/people/spo-shin/ (2011年8月21日に一部更新)					

(表より)

職員二名による事務局開設。事業内容の前進。
五・今後の振興会の目指すべき方向
・振興会理念の再確認と実践(とりわけ「スポーツの輪を広げる活動の推進」)

芝田先生のお話をお聞きすると、振興会はその時その時の節目に京都の障害者スポーツにとつて大切なことを見つけて作り出してきた運動団体であることを強く感じました。つどい500は、つどいにとつても振興会にとつても、その大きな節目にしていききたい。つどいで話している「つどい500」への取り組みを振興会40周年の場に出して、今までのつどいの記念事業以上に振興会の取り組みとして一緒に育てていききたいと考えます。
芝田先生の講演から学び、これからのつどいに活かすことは大きく二つあると考えます。
一つは、つどいは振興会の活動の中でスポーツの輪を広げる活動であり、障害児者のスポーツ権の拡大につながる大きな活動であることを確信を持って取り組むこと。今のまま

視野を広く持ち、宣伝・啓発に努め、つどいのマニユアル作りも進める。
一つは、つどい充実に向けて、粘り強く、一歩ずつ前進するという気持ちで取り組む。

一六名のつどいスタッフが芝田先生のお話を聞いて熱い時間を共有しました。つどい以外の専門部の方の参加がなかったのは残念でした。十一月の40周年記念事業ではこの熱い思いをつどい以外のスタッフとも語り合いたいと考えています。

スポ振ルネサンス (41)

「心でつなぐ活動を」

京都障害者スポーツ振興会

副会長 水谷 裕

今月4日、台風一過秋空の下、府立丹波自然運動公園において、「第27回全京都車いす駅伝競走大会」並びに「第21回全京都ミニ車いす駅伝競走大会」が開催され……
と、書こうと思っていたのですが……

皆さんもご承知のとおり、台風12号のノロノロとした動きは各地に甚大な被害をもたらしたばかりでなく、毎年恒例となりました「全京都車いす駅伝競走大会」並びに「全京都ミニ車いす駅伝競走大会」を中止を余議なくし、「幻の大会」にしてしまいました。

走大会」並びに「全京都車いすミニ車いす駅伝競走大会」を中止を余議なくし、「幻の大会」にしてしまいました。

「幻の大会」になって、昨年の大会以後、今年の大会で結果を出すことを目指して様々な環境でチームの仲間とともに練習を重ねてきた選手にとつて、大変残念でならないことであることは言うまでもありませんが、選手以外にも落胆している人たちがいます。それは、競技を通して見られる障害のある人々の笑顔と感動を支えていただいている関係機関・団体の人たちです。何カ月も前から実行委員会を持ち、数日前から周到に準備を行ってきた準備万端で開催できない時のガツクリとした脱力感、失意さえ感じさせるものです。

この大会は、スポ振ルネサンス(11)にも書いたとおり。昭和63年に開催された「第24回全国身体障害者スポーツ大会」で、公開競技のひとつとして全国に向けて発信され、今日の「全京都車いす駅伝競走大会」に発展した素となる大会で、全国的に発信する以前、昭和57年、当時、女性

ながら綾部市を軸に府内北部で障害のある人々のスポーツ活動をけん引していた故市林女史が中心になって始めた「丹の国あやべ車いす駅伝競走大会」がはじまりで、2回つづき、これを基となして、1年おいて発展させる形で、昭和60年に「全京都車いす駅伝競走大会」と名称を変更し、丹波自然運動公園へ場所を移して行われるようになり、さらに、重い障害のある人々にも駅伝にチャレンジしてもらえようにと、平成3年から申告タイムで競う「全京都ミニ車いす駅伝競走大会」を同時開催するようになり、現在恒例となつた両車いす駅伝競走大会に繋がって来ているのです。

私も、振興会のスタッフのひとりとして毎年参加して、選手の皆さんが競技に前向きにチャレンジされる姿を見せていただき、振興会の活動を続けてきて本当に良かったと思う場面に多々遭遇することが多々あります。

今年「幻の大会」となった「第27回全京都車いす駅伝競走大会」には15チームが、また、「第21回全京都ミニ車いす駅伝競走大会」には20チームがエントリーをしており、様々な感

動の場面との遭遇を期待していたのに、非常に残念でなりません。
中でも、重い障害のある人々の参加する「ミニ車いす駅伝」ではなく、軽い障害のある人々や障害のない人々の参加する「車いす駅伝」にチャレンジし続ける障害のある子ども達で編成された「ガンバキッズ」というチームがあるのですが、大変素晴らしいと思います。このチームは、障害児の訓練施設の利用仲間と指導者たちで構成されていますが、何が素晴らしいかというと、単に、指導者が障害のある子ども達を引っ張って大会に出場させるというのではなく、本人たちのチャレンジする精神(こころ)と、子ども達にチャレンジさせる親の先を見据えた精神(こころ)と指導者の支える精神(こころ)とを融合した取り組み体制で、たとえ勝てないと判つていても、毎回挑んでくるところです。こういつた取り組み方こそ、京都障害者スポーツ振興会が求め続けている障害のある子ども達のスポーツ振興の基礎的考え方のひとつであり、ある意味で、これぞインクルーシブスポーツといえるのではないのでしょうか。